



図一 学習院大学本「須磨」巻 表紙

蔵している。これは、江戸初期に書写された本であり、折紙綴葉

はじめに

三條西家旧蔵本（学習院大学所蔵）『源氏物語』
 「須磨」巻の書誌解題と翻刻
 — 日本大学所蔵三條西家旧蔵本との比較 — （後半）

武藤那賀子

装という装訂である。^{〔二〕}折紙綴葉装は、連歌師たちが所持していた本に多くみられ、持ち運びに適したものである。^{〔三〕}本帖は、折紙綴葉装の中でも特にサイズが小さく、仮綴の糸も残っており、珍しいものである。また、後表紙見返にある「入道久我殿女房」の書入れは、三條西家と久我家の関わりを示すものと考えられる。では、本帖は、いわゆる三條西家本源氏物語とどのような関係にあるのだろうか。

本稿では、前稿に引き続き、本文と書入れを翻刻し、日本大学が所蔵する三條西家旧蔵本「須磨」巻と^{〔四〕}比較して、本帖の位置づけを行なう所存である。なお、第三一丁オモテから扱うこととする。

一・本文と書入れの翻刻、および日本大学本との比較

以下では、本帖の第三一丁オモテ以降の翻刻を行ない、日本大学本と比較する。凡例その他は以下の通りである。

図二 学習院大学本「須磨」巻 30丁ウラ・31丁オモテ



凡例

- 一、改行箇所や和歌の書式は原本のままとし、利用の便を考え、丁数とその表裏、行数を付記した。

- 一、原本に用いられている変体仮名は、すべて現行の平仮名に統一した。ただし、原本の平仮名中に片仮名を混用した箇所は、片仮名を平仮名に改めた。

- 一、清濁、句読点も原本のままにした。

- 一、ミセケチは、現状では文字に二本線を引いている。このため翻刻では、ミセケチを、取り消し線で示した。また、消した上で文字を補っている場合は、^{ミセケチ}ミセケチにした文字の隣に補った。

- 一、傍記は、該当する文字の横にそのまま示した。

- 一、補入記号のない補入は「一」で示し、補入記号のある補入は「へ」で示した。

- 一、虫食いなどの影響で見え辛くなったために判読し辛い文字は「〔 〕」で括って示した。

- 一、問題のある箇所についてはアルファベットを付し、注を各丁ごとに載せておく。なお、朱点の指摘に波線がある場合は、

日本大学本と同じ箇所[〃]に朱点があることを示している。

- 一、朱合点は、〃で示した。

日本大学本との比較

学習院大学本の丁数の下にある丸括弧内に、日本大学本の該当丁数を示した。学習院大学本の翻刻に一重傍線がある場合は、日本大学本との漢字と仮名の違いを示している。また、二重傍線は文字の違いを示しており、各丁の最後に【異同】の項目を掲げ、

「学習院大学本——日本大学本」となるようにして違いを示した。ただし、送り仮名の有無、踊り字か仮名かの違いについては表記していない。なお、日本大学本の異同箇所の翻刻は、学習院大学本の凡例と同じである。

31オ (32ウ) 33オ)

- 1 忍ひつ、あはれをもおほく御らんし過し
- 2 すくくしくもてなし給ひしをかはかりにうき
- 3 世のひとことなれとかけてもこのかたには
- 4 いひいつる事なくてやみぬるはかの人の
- 5 御おもむけもあなち成し心のひくかたに
- 6 まかせすかつはめやすくもてかくしつるぞ
- 7 かしあはれに恋しくもいか、覚し出さらん
- 8 御返りもすこしこまやかにてこの比はいと、
- 9 しほたる、ことをやくにてまつしまに

a・b・d 朱墨で「く」をミセケチにし、「う」と傍記。

c 朱墨で「か」の下に補入記号を入れ、「り」と傍記。

【異同】 1 く——う 2 く——う

- 4 かの——かりの 5 お——を
- 7 く——う ん——む 8 ——ナシ

31ウ (33オ) 33ウ)

- 1 としふるあまもなけきをそつむかんの君の
- 2 御かへりには
- 3 浦うらにたくあまたにつ、む恋なれはくゆる
- 4 けふりよゆくかたそなきさらなること、もは
- 5 えなんとはかりいさ、かにて中納言の君の
- 6 中ちゅうにありおほしなげくさまなどいみしく
- 7 いひたりあはれと思ひきこえ給ふふしくも
- 8 あれはうちなかれ給ひぬひめ君の御ふみは心
- 9 ことにこまかなりし御かへりなればあはれなる

32オ (33ウ) 34オ)

- 1 ことおほくて
- 2 うら人のしほくむ袖にくらへみよ波路
- 3 へたつるよるの衣をもの、色し給へるさまなど
- 4 いときよら也何事もらうくしく物し給ふを
- 5 思ふさまにていまはこと事に心あはた、しく
- 6 行か、つらふかたもなくしめやかにてあるへ
- 7 き物をとおほすにいみしくくちをしく
- 8 よるひるおもかけに覚えてたえかたく
- 9 思ひひてられ給へは猶忍ひてやむかへましと

a b c d e 朱墨で「く」をミセケチにし、「う」と傍記。

【異同】 4 5 7 く—う 8 え—へ く—う

32ウ (34オ〜34ウ)

- 1 おほす又うち返しなそやかううき世に^a
- 2 つみをたにうしなはんとおほせはやかて御さ^b
- 3 うし^cにて明くれをこなひてをはず大殿の
- 4 若君^cなどの御こととあるにもいとかなしけ
- 5 れとをのつからあひみん^dたのもしき人々^e物
- 6 し給へはうしろめたくはあらずと覺しな
- 7 さる、は中くこのみちのまとはれぬにや
- 8 あらんまことやさはかしかりしほとのみまき
- 9 れにもらしてけりか^fのいせの宮へも御つかい

a 朱墨で「う」をミセケチにし、「く」と傍記。

b 朱墨で「さうし」をミセケチにし、「うし」の右に「しやうしん」と傍記。

c 墨で「なと」にミセケチ。

d 墨で「み」の下に補入記号を入れ、「て」と傍記。

e 朱墨で「く」をミセケチにし、「う」と傍記。

f 「り」の下に朱点。

【異同】 1 う—く 2 さうし—しやうしん

3 を—お 4 なと—ナシ

5 み—みて —ナシ 々—く

6 く—う

33オ (34ウ〜35オ)

- 1 ありけりかれよりもふりはへたつねまいれ
- 2 りあさからぬこと、もかき給へりことの葉^a
- 3 筆^bつかひなどは人よりことになまめかしく^c
- 4 いたりふかくみえたり猶^bうつ、とは思^cふ給へら
- 5 れぬ御すまひ^dをうけたまはるもあけぬよ
- 6 の心まとひかとなんざりともとし月は
- 7 へたて^e給はしと思ひやり聞えさするにも
- 8 つみふかき^fみのみこそ又きこえさせんこと
- 9 もはるかなるへけれ^d

a 朱墨で「く」をミセケチにし、「う」と傍記。

b 「り」の下に朱点。

c 朱墨で「ふ」の上から「ひ」と書く。

d 「れ」の下に朱墨で「は」と書く。

【異同】 3 く—う 4 ふ—ひ 5 ひ—ゐ

7 たて—ナシ

33ウ (35オ〜35ウ)

1 うきめかる伊勢^eをのあまを思ひやれもし

2 を^fたるてふすまのうらにてよろつにおもふ

3 給へみたる、世のありさまも猶いかになり
4 はつへきにかとおほかり

5 いせ島やしほひの方にあさりてもいふ

6 かひなきは我身成けり物をあはれと寛

7 しけるま、にうちをきくかき給へるしろき

8 からのかみ四五枚はかりをまきつ、けてすみ

9 つきなど見ところありあはれに思ひきこえし

【異同】

1 を—お 2 を—ほ

34才 (35ウく36才)

1 人を—ふしうしと思ひきこえし心あやまり

2 にかのみやす所もおもひうんしてわかれ給ひ

3 にしとおほせはいまにいとをしくかたしけ

4 なき物に思ひきこゑ給ふおりの御ふみ

5 いとあはれなれはおほん使さへむつましく

6 て二三日すゑさせ給ひてかしの物かたり

7 などせさせてきこしめすわかやかに気色

8 あるさふらひの人成けりかくあはれなる

9 御すまゐなれはかやうの人もおのつから物

【異同】

3 を—お く—う 5 く—う

9 お—を

34ウ (36才く36ウ)

1 遠からてほのみたてまつる御さまかたちを

2 いみしくめてたしと涙をとしをりけり

3 御返りかき給ふことの葉思ひやるへしかく

4 世をはなるへき身と思ふ給へましかはおな

5 しくはしたひ聞えまし物をなとなんつれく

6 と心ほそきまゝに

7 伊勢人の波のうへこくおふねにも

8 うきめはからてのらまし物を

9 あまかつむなけきのなかにしほたれて

【異同】

2 く—う を—お を—お

7 お—を

35才 (36ウく37才)

1 いつまですまのうらになかめん

2 聞えさせんことのいつとも侍らぬこそつき

3 せぬ心ちし侍れなどそありけるかやうに

4 いつ、^aにもおほつかなからすきこゑかはし給ふ

5 花ちるさともかなしと覚しけるま、にかき

6 あつめたる御心、^bみ給ふは、^cをかきもめな

7 れぬ心ちしていつれもうちみつ、なくさめ

- 8 給へと物思ひのもよほしくさなめり
9 あれまさる軒の忍ふをなかめつゝしけくも

a 朱墨で「ゝ」をミセケチにし「こ」と傍記。

b 朱墨で「た」の下に補入記号を入れ、「まへ」と傍記。

c 朱墨で「は」をミセケチにし「に」と傍記。

【異同】 4 、、——こ 糸——え

6 た——給へ はを——にお

35ウ（37オ〜38オ）

- 1 露のかゝる袖かなとあるをけに／＼むくらより
- 2 外のうしろみもなきさまにておはすらん
- 3 と覺しやりて長雨についち所々くつれ
- 4 てなど聞給へは京のけいしのもとにおほ
- 5 せつかはしてちかきく／＼の御庄の物なども
- 6 よをさせてつかふまつるへきよしの給はず
- 7 かの君は人わらへにいみしくおほしくつを
- 8 るゝをおとゝいとかなしくし給ふ君にて
- 9 せちに宮にも内にもそうし給ければか

a 朱墨で「い」の下に補入記号を入れ、「ひ」と傍記。

【異同】 3 い——いひ

6 ふ——う

7 く——う を——ほ 8 く——う

36オ（38ウ〜38ウ）

- 1 きりある女御みやす所にもおはせず大やけ
- 2 さまのみやつかへとおほしなせり又かのにく
- 3 かりしゆへこそいかめしきこともいてこしか
- 4 ゆるされ給ひてまいり給へきにつけても猶
- 5 心にしみにしかたそあはれに覺え給ける
- 6 七月に成てまいり給いみしかりし御思ひの
- 7 名残なれは人のそしりもしろしめされす
- 8 れひのうへにつとさふらはせ給ひてよろつに
- 9 うらみかつはあはれにちきらせ給ふ御さま

【異同】 5 し——し 8 ひ——い

9 御さま——（御）さま

*2行目の「おほしなせり」は、日本大学本では、「せ」の箇所
に「をイ」という異本注記がある。

36ウ（38ウ〜39オ）

- 1 かたちもいとなまめかしくきよらなれと
- 2 おもひいつる事のみおほかる心のうちそかた
- 3 しけなき御あそひのつゐてにその人のなき
- 4 こそいとさう／＼しけれいかにましてさおもふ
- 5 人おほからん何こともひかりなき心ちする

- 6 かなとの給はせて院の覚しのたまはせし
 7 御心をたかへるかなつみうらむかしとてなみた
 8 くませ給ふにえねんしたまはず世中こそ
 9 あるにつけてもあちきなき物成けれと

a 「き」の下に朱点。

b 「に」の下に朱点。

c 「れ」の下に朱点。

d 朱墨で「へ」の下に補入記号を入れ、「つ」と傍記。

【異同】 1 く—う 7 へ—へつ む—ん

37オ (39オ〜39ウ)

- 1 思ひしるまゝに久しく世にあらん物となん
 2 さらに思はぬさもなりなんにか、おほざる
 3 へきちかきほどのわかれに思ひをとされん
 4 こそねたけれ、いける世にとはけによからぬ
 5 人のいひをきけんといとなつかしき御さま
 6 にて物をまことにあはれとおほしいりて
 7 のたまはするにつけてほろ／＼とこほれい
 8 つれはさりやいづれにおつるにかとのたま
 9 はすいまゝてみこたちのなきこそさう／＼

a 「に」の下に朱点。

- b 「き」の下に朱点。
 c 「て」の下に朱点。
 d 「は」の下に朱点。
 e 「す」の下に朱点。

【異同】 6 あはれと—(あはれと)

37ウ (39ウ〜40オ)

- 1 しけれ東宮をみんののたまはせしさまに
 2 おもへとよからぬこともいづくめれは心くる
 3 しくなど世を御心の外にまつりこちなし
 4 給ふ人のあるにわかき御心のつよき所なき
 5 ほとにていとをしと覚したることもおほ
 6 かりすまにはいと、心つくしの秋かせに海
 7 はすこし遠けれとゆきひらの中納言の
 8 せきふきこゆるといひけんうら浪よる／＼はけ
 9 にいとちかく聞えて又なくあはれなる物は

a 「と」の下に朱点。

b 朱墨で「と」の下に補入記号を入れ、「と」と傍記。

c 「り」の下に朱点。

【異同】 2 と—と、 3 く—う 5 を—お

38オ (40オ〜40ウ)

- 1 かゝる所の秋成けり御まへにいと人すくなに
- 2 てうちやすみわたれるにひとりめをさま
- 3 してまくらをそはたて、よものあらしを聞
- 4 給ふに浪たゝこゝもとにたちくる心ちして
- 5 なみたおつとも覺えぬに枕うくはかりに成に
- 6 けりきんをすこしかきならし給へるかわれ
- 7 なからいとすこきこゆれば引さし給て
- 8 恋わひてなくねにまかふうら波はおもふ
- 9 かたよりかせやふくらんとうたひ給へるに

a 朱墨で「く」をミセケチにし「う」と傍記。

【異同】 7 く——う

38ウ（40ウ〜41オ）

- 1 人々おとろきてめてたく覺ゆるに忍はれて
- 2 あひ^aなうおきみつゝはなをしのひやかにかみ
- 3 わたすけ^aにいか思ふらん我身ひとつに
- 4 より^bをやはらからかた時たちはなれかたく
- 5 ほとにつけつゝ思ふらん家を別てかくま
- 6 とひあへるとおほすにいみしくていとかく
- 7 思ひしつむさまを心ほそしと思ふらんとおほせ
- 8 はひるは何くれとたはふれことうちの給ひ
- 9 まきははしつれくなるまゝに色／＼のかみ

a 「す」の下に朱点。

b 「り」の下に朱点。

【異同】 1 く——う 2 ひ——い 4 を——お

39オ（41オ〜41ウ）

- 1 をつきつゝ、手ならひをしたまひめつらしき
- 2 さまなるからのあやなどにさま／＼のゑともを
- 3 かきすさひ給へるひやうふのおもてともなど
- 4 いとめてたく見所あり人々のかたり聞えし
- 5 海山のありさまをはるかにおほしやりしを
- 6 御めにちかくてはけにおよはぬいそのたゝす
- 7 まゐ^aなくかきあつめ給へりこの比の上すに
- 8 すめるゝ千枝つねのりなとをめしてゝつくりゑ
- 9 つかうまつらせはやと心もとなかりあへりな

a 「く」の下に朱点。

【異同】 3 ひ——み 6 お——を 7 ゐ——ひ

39ウ（41ウ〜42オ）

- 1 つかしくめてたき御ありさまに世の物おもひ
- 2 わすれてちかくなれつかふまつるをうれし
- 3 きことにて四五人はかりそつとさふらひける

- 4 せんさいの花色くさきみたれおもしろき
 5 夕ぐれに海みやらる、らうに出給ひてた、
 6 すみ給ふ御ありさまのゆ、しくきよらなる
 7 こと所からはましてこの世の物とみえたまはず
 8 しろきあやのなよ、かなるしをん色など
 9 たてまつりてこまやかなる御なをし

a 「く」の右に朱墨で「う」と傍記。

b 朱墨で「あり」をミセケチにする。

【異同】 1 く—う あり—ナシ

2 く—う ふ—う 6 あり—ナシ

40オ (42オく42ウ)

- 1 おひしとけなくうちみたれ給へる御さまにて
 2 〳〵釈迦牟尼仏弟子と名のりてゆる、かに
 3 よみ給へるまたよにしらすきこゆをきより
 4 舟ともものうたひの、しりてこき行なども
 5 きこゆほのかにた、〳〵ちひさきとりのうかへ
 6 るとみやらる、も心ほそけなるにかりの
 7 つらねてなく声〳〵かちの音にまかへるをう
 8 ちなかめ給てなみたこほる、をかきはらひ
 9 給へる御てつきくろき御す、にはへ給へるはふる

a 朱墨で「また」の隣に「又」と傍記。

b 朱墨で「き」の下に補入記号を入れ、「の」と傍記。

【異同】 3 を—お 5 ひ—い

9 き—きの へ—え

40ウ (42ウく43ウ)

- 1 さとの女恋しき人々の心なくさみにけり
 2 はつかりは恋しき人のつらなれやたひの
 3 空とふ声のかなしきとのたまへはよしきよ
 4 かきつらねむかしのことそおもほゆるかりは
 5 そのよのともならねとも民部の大夫
 6 心からとこよをすて、なくかりを雲のよそ
 7 にも思ひけるかなさきの右近のそう
 8 とこよいて、たひの空なるかりかねも
 9 つらにをくれぬほとそなくさむ友など
- 【異同】 1 心—心みな 5 の—ナシ 夫—輔
 7 そ—せ
- 41オ (43ウく44オ)
- 1 まとはしてはいかに侍らましといふおやの
 2 ひたちに成てくたりしにもさそはれてまひ
 3 れる成けりしたには思ひくたくへかめれとほ

- 4 こりかにもてなしてつれなきさまにしありく
- 5 月のいとほなやかにさしいてたるにこよひは
- 6 十五夜成けりと覺し出て殿上のあそひこ
- 7 ひしく所くななめ給ふらんかしと思ひやり給ふ
- 8 にも月のかほのみまもられ給／＼千里の外
- 9 故人の心とすし給へるれいのなみたもと、

a 「き」の下に朱点があるか。

b 朱墨で「の」の下に補入記号を入れ、「御」と傍記。

c 朱墨で「す」の下に補入記号を入れ、「む」と傍記。

【異同】 2 ひ——い 8 も月のかほのみまもられ給

へつけても月のかほのみまほられ給 の——ナシ

9 す——すん

41ウ（44オ〜44ウ）

- 1 められす入道宮の霧やへたつるとのた
- 2 まはせしほ^aといはんかたなく恋しくおりの
- 3 事思ひ出給ふによゝとなかれ給ふ夜ふけ
- 4 侍りぬときこゆれとなをいりたまはず
- 5 みるほとそしはしなくさむめぐりあはん
- 6 月のみやこははるかなれともそのようゑの
- 7 いたなつかしく昔物語などし給ひし御さまの
- 8 院ににたてまつり給へりしも恋しく思ひいで

- 9 きこゑ給ひて／＼恩賜の御衣はいまこゝにありと

a 朱墨で「はせ」をミセケチにし「ひ」と傍記。

b 朱墨で「賜」の横に「シ」と傍記。

【異同】 2 はせ——ひ く——う

6 ようゑ——よの夜うへ 7 く——う

8 へり——へり） く——う 9 ゑ——え

42オ（44ウ〜45オ）

- 1 すしつ^a、いり給ひぬ御そはまことに身は

2 なたすかたはらにをき給ひけり

3 うしとのみひとへに物はおもほえてひたり

4 みきにもぬる、袖かなそのころ大式はのほり

5 けるいかめしくるいひろくむすめかちにて

6 とろせかりければ北のかたは舟にてのほる

7 うらつたひにせうようしつ、くるに外より

8 もおもしろきわたりなれば心とまるに大将

9 かくてをはすときけはあひなうすいたるわ

a 朱墨で「す」の下に補入記号を入れ、「む」と傍記。

【異同】 1 す——すん 2 ひけ——へ

5 く——う 7 せうよう——遣遥

9 を——お ひ——い う——く

42ウ (45オ〜45ウ)

- 1 かきむすめたちは舟のうちさへはつかし
- 2 心けさうせらるまして五せつはつなて^a
- 3 引すくるもくちをしきにきんの声かせに
- 4 つきてはるかに聞ゆるに所のさま人の御ほ
- 5 ともの、ねの心ほそさとりあつめ心あるかき
- 6 りはみな、きにけりそちおほんせうそこ^b
- 7 きこゑたりいとほるかなるほとりまかり
- 8 のほりてはまついつしかさふらひてみやこの
- 9 御物かたりもとこそ思ふ給へ侍りつれ思ひ

a 朱墨で「つ」の下に補入記号を入れ、「の君」と傍記。

b 「は」を朱墨でミセケチにする。

c 朱墨で「そち」の右に「帥」と傍記。

【異同】 2 く—う さ—しや つ—ちの君

3 を—お

6 は—ナシ にけり—にけり^a

7 ぬ—え 9 ふ—ひ

43オ (45ウ〜46オ)

- 1 の外にかくておはしましける御やとをまかり
- 2 すき侍るかたしけなくかなしくも侍るかな^a

3 あひしりて侍る人々これかれまふてきむか^b

4 ひてあまた侍れは所せさを思ふ給へは、かり^c

5 侍ることも侍りてえさふらはぬ事ことさらに^d

6 まいり侍らんなど子のちくせんのかみそま^e

7 いれるこのとの、藏人になしかへりみ給ひ

8 し人なれはいともかなしいみしと思へとも

9 またみる人々のあれば聞えをおもひてしはし^f

a 「な」の下に朱点。

b 朱墨で「々」の下に補入記号を入れ、「さるへき」と傍記。

c 朱墨で「ふ」をミセケチにしている。

d 朱墨で「と」の下に補入記号を入れ、「と」と傍記。

e 朱墨で「と」の下に補入記号を入れ、「きこえたり」と傍記。

f 「また」の右に朱墨で「又」と傍記。

【異同】 2 く—う

3 人々—人くさるへき まふて—まで

4 さ—さ ふ—ひ 5 と—と、

6 まいり—(まいり) と—ときこえたり

43ウ (46オ〜46ウ)

- 1 もえたちとまらす都はなれてのちむ
- 2 かしたしかりし人々あひみることかたくの
- 3 みなりにたるにかくわざとたちより物し

- 4 たることゝのたまふ御かへりもさやうに
- 5 なんかみなくく返りてをはするさまかた
- 6 るにそちよりはしめむかへの人々まかく
- 7 しくなきみちたり五せちはとかくして
- 8 聞えたり
- 9 ことの音に引とめらるゝつなてなは

a 「み」の下に朱点。

b 朱墨で「る」の下に補入記号を入れ、墨で「御あり」と傍記。

c 朱墨で「か」の上から「か」と書く。

【異同】 1 と——と〈と〉

5 を—お る—る御あり 7 く—う

44オ（46ウく47オ）

- 1 たゆたふこゝろ君しるらめやすきくしさも
- 2 人なとかめそと聞えたりほゝゑみてみた
- 3 まふいととはつかしけなり
- 4 心ありてひきてのつなのたゆたは、うち
- 5 すきましますまのうらなみいさりせんとは
- 6 思はさりしはやとありむまやのおさにくし
- 7 とらする人も有けるをましてをちとまり
- 8 ぬへくなん覚えける都には月日過るま、に
- 9 みかとははしめたてまつりて恋きこゆる

a 「み」の下に朱点。

【異同】 2 ゑ—え 6 お—を 7 を—お

44ウ（47オく47ウ）

- 1 折ふしおほかり春宮はましてつねに覚し
- 2 いてつゝ忍ひてなき給をみたてまつる御め
- 3 のとまして命婦の君はいみしくあはれに
- 4 みたてまつる入道の宮は春宮の御事を
- 5 ゆゝしくのみおほししに大將もかくさすらへ
- 6 給ひぬるをいみしくおほしなける御はらから
- 7 のみこたちむつましく聞え給ひしかんたち
- 8 めなとはしめつかたはとふらひ聞え給ふなど
- 9 ありきあはれなるふみをつくりかはしそれに

a 「る」の下に朱点。

【異同】 3 く—う 4 の—ナシ 5 く—う
6 く—う 7 の—ナシ

45オ（47ウく48オ）

- 1 つけても世中のみめてられ給へは后宮き
- 2 こしめしていみしくのたまひけり大やけの
- 3 かうしなる人は心にまかせてこの世のあちは

- 4 ひをたにすることかた^くこそあんなれおもし
- 5 ろき家^ゐして世中をそしりもときて
- 6 かの^しかをむまといひけん人のひかめるやうに
- 7 ついせうするなどあしきこと、もきこ^ゑけ
- 8 れはわつらはしとてたえてせうそこ聞^え
- 9 給ふ人なし^二条院のひめ君はほとふるま、に

- a 「し」に朱墨で濁点を付す。
b 「ち」に朱墨で濁点を付す。

c 「し」の下に朱点。

【異同】 4 く——う あん——あ 7 ゑ——え

45ウ (48オ→48ウ)

- 1 おほしなくさむを^りなしひんかしのたいに
- 2 さふらひし人々もみなわたりまいりはしめは
- 3 などかさしもあらんと思^ひしかとみたてまつ
- 4 りなる、ま、になつかしく^をかしき御ありさ
- 5 ままめやかなる御心は^へも思^ひやりふかくあはれ
- 6 なれはまかて^{ちる}もなしなへてならぬきはの
- 7 人々にはほのみえなし給^ふそこのらの中に
- 8 すくれたる御心さし^もことほり成^{けり}りとみた
- 9 てまつるかの御すま^ひには久^しくなるま、に

a 「て」の下に朱点。
b 「る」の下に朱点。

【異同】 1 を——お 3 ん——む

- 4 ま、——ほと^{ま、い} くを——うお
- 5 へ——え
- 9 ひ——ゐ く——う

46オ (48ウ→49オ)

- 1 えねんしすくすましく^覚え給へと我身
- 2 たにあさましきすくせとおほゆるを^すま^ひ
- 3 に^いかてかうちくしてはつきなからんさまをお
- 4 もひ返し給ふ所につけてよろつの事さま
- 5 かはりみ給へしらぬしも人のうへをもみ給ひ
- 6 ならばぬ御心ちにめさましく^かたしけなく^み
- 7 つからおほさるけふりのいとちかく^時く^立くる
- 8 をこれやあまのしほやくならんと^覚しわたる
- 9 は^をはしますうしろの山にしはといふ物

a 墨で「を」をミセケチにする。

b 朱墨で「に」の下に補入記号を入れ、「て」と傍記。

c 朱墨で「か」の下に補入記号を入れ、「は」と傍記。

【異同】 1 く——こ く——う

- 2 を——ナシ ひ——ゐ
- 3 に——にて か——かは

6 く——う く——う 7 く——う
9 を——お

46ウ（49オ〜49ウ）

- 1 ふすふる成けりめつらかにて
- 2 山かつのいほりにたけるしはくもこと、
- 3 ひこなんこふるさと人冬に成て雪ふり
- 4 あれたる空の気色もことにすくなくかめ給
- 5 てきを引すさひ給ひてよしきよにうた
- 6 うたはせ大夫よこふふきてあそひ給ふ
- 7 心とめてあはれなるてなと引給へるにこと
- 8 もの、ね声ともはやめて涙をのこひあへり
- 9 昔このくに、つかはしけん女を、ほしやりて

a 墨で「ね」をミセケチにする。

【異同】 3 に——にトイ 4 る——るころ

5 ひ——み 6 夫——輔
8 ね声——こゑ
9 昔——（むかし） 、——お

47オ（49ウ〜50ウ）

- 1 ましていかなりけんこの世にわか思ひきこゆる
- 2 人などをさやうにはなちやりたらんことなと

- 3 思ふもあらんことのやうにゆ、しくて霜の、ち
- 4 の夢とすんし給月いとあかくさしいりては
- 5 かなきたひのおまし所はおくまてくまなし
- 6 ゆかのうへによふかき月空もみゆいりかた
- 7 の月かけすこくみゆるにた、これにしに
- 8 行成とひとりこち給ひて
- 9 いつかたの雲路にわれもまよひなん月の

a 墨で「月」をミセケチにする。

b 朱墨で「月」の下に補入記号を入れ、「の」と傍記。

【異同】 3 く——う 4 く——う 6 月——ナシ
7 月——月の 9 よ——よトイ

47ウ（50ウ〜51オ）

- 1 みるらんこともはつかしとひとりこち給ひて
- 2 れひのまとろまれぬあか月の空に千鳥
- 3 いとあはれになく
- 4 友ちとりもろこゑになくあか月はひとり
- 5 ね覚のともたのもしまたをきたる
- 6 人もなければ返々ひとりこちてふし給へり
- 7 よふかく御てうつまいりて御ねんすなとし給
- 8 もめつらしきことのやうにめてたくのみおほえ
- 9 給へはえみたてまつりすてす家にあからさま

a 「り」の下に朱点があるが、これは、次の丁の朱点が移った
ものと考えられる。

【異同】 2 ひ——い 5 を——お

48才 (51才〜51ウ)

- 1 にもえ出^aさりけりあかしのうらはた、はひ
- 2 わたるほとなればよしきよの朝臣かの入
- 3 道のむすめを思ひ^bいてふみなどやりけれと
- 4 返事もせずち、の入道そきこゆへき事
- 5 なんあからさまにたいめんもかなといひけ
- 6 れとうけひかさらん物ゆへ行か、りてむな
- 7 しく返らんうしろてもをこなるへしとくん
- 8 しいたくてゆかす世^cにしらす心たかく^d
- 9 おもへるにくにのうちはかみのゆかりのみ

a 「り」の下に朱点。

b 朱墨で「い」の上から「出」と書く。

c・d 朱墨で「く」をミセケチにし「う」と傍記。

【異同】 3 て——て、

8 く——う ゆ——い く——う

48ウ (51ウ〜52才)

- 1 こそはかしこき^aことにすめれとひかめる心は
- 2 さらにさも思はてとし月をへけるにこの君
- 3 かくてをはずと聞て母君にかたらふやう
- 4 きりつほのかういの御はらの源氏のひかるきみ
- 5 こそ大やけの御かしこまりにてすまのう
- 6 らに物し給ふなれあこの御すくせにて覚え
- 7 ぬことのあるなりいかてかゝるつゐてにこの
- 8 君にたてまつらんといふ母あなかたはや京の
- 9 人のかたるをきけはやんことなき御めとも

【異同】 3 を——お 7 ゐ——い 8 は——わ

49才 (52才〜52ウ)

- 1 いとおほくもち給てそのあまり忍ひく〜み^a
- 2 かとの御めをさへあやまち給てかくもさはか
- 3 れ給ふなる人はまさにかくあやしき山かつ
- 4 を心と、め給ひてんやといふはらたちて
- 5 えしりたまはし思ふ心ことなりさる^b心をし
- 6 給へつゐてしてこ、にもを^cはしまさせんと
- 7 心をやりていふもかたくなしくみゆまはゆき
- 8 まてしつらひかしつ^cけり母君なとかめて
- 9 たくとも物^d、はしめにつみにあたりてなか

a 「ち」の上から朱墨でミセケチにしているように見えるが、
判然としない。

b 「り」の下に朱点。

c 朱墨で「つ」の下に補入記号を入れ、「き」と傍記。

d 「、」の右に朱墨で「の」と傍記。

【異同】 1 ち——ぢ

6 ゐ——い を——お せ——（せ）

8 つ——つき

49 ウ（52ウ↘53オ）

1 されてを^aはしたらん人をしも思ひかけんさて

2 も心をと、め給ふへくはこそあらめたはふ

3 れにてもあるましきこと成といふをいと

4 たくつふやくつみにあたることはもろこし

5 にもわかみかともかく世にすくれな^bに

6 ことにも人にことになりぬる人のかなら

7 すあることなりいかに物し給ふ君そ^b母みや

8 す所はをのかおち^cにも物し給しあせちの

9 大納言の御むすめなりいとかうさくなる

a 朱墨で「て」をミセケチにする。

b 朱墨で「そ」の下に補入記号を入れ、「こ」と傍記。

c 朱墨で「ち」に濁点をつける。

【異同】 1 てを——お 2 を——ナシ

7 そ——そこ

50 オ（53オ↘53ウ）

1 名をとりて宮つかへにいたし給へりしにこ

2 くわうすくれてときめかし給^aことならひ

3 なかりけるほとに人のそねみおもく^aてうせ

4 給ひにしかとこの君のとまり給へるいとめて

5 たしかし女は心たかくつかふ^bへき物なり

6 をのれかゝるる中人なりとておほしすてし

7 なといひるたりこのむすめすくれたるか

8 たちならねとなつかしくあてはかに心はせある

9 さまなとそけにやんことなき人にをとる

a 朱墨で「も」をミセケチにし「ほ」と傍記。

b 朱墨で「し」をミセケチにし「く」と傍記。

【異同】 3 も——ほ 5 し——く ふ——う

7 など——（など） 8 く——う

50 ウ（53ウ↘54オ）

1 ましかりける身のありさまをくちをしき

2 物に思ひしりてたかき人はわれを何の数

3 にもおほさしほとにつけたる世をはさらに

- 4 みし命^aなかくて思ふ人におくれなはあまに
 5 もなりなん海^aのそこにもいりなんなどそ
 6 思ひけるち、君所せく思ひかしつきてとしに
 7 二たひすみよしにまふてさせけり神の
 8 御しるしをそ人知れすたのみ思ひけるすまに
 9 はとし返りてひなかくつれくなるにうへし

a 「人」の右に朱墨で「く」と傍記。

【異同】 4 人にお——人く^をにを 5 そ——そ^せ

- 6 思ひ——(おもひ) 7 ふ——う
 9 て——(て)

51オ (54オく54ウ)

- 1 わか木の桜ほのかにさきそめて空の気色
 2 うら、かなるによろつの事おほしいて
 3 られてうちなき給をりおほかり二月廿日
 4 あまりいにしとし京を別し時心くるしかり
 5 し人々の御有さまなといと恋しく南殿の
 6 さくらはさかりに成ぬらん一とせの花のゑん
 7 にゐんの御気色内のうゑのいとよらに
 8 なまめきてわかつくれるくをすし給ひ
 9 しも思ひいて聞え給ふ

a 朱墨で「き」をミセケチにし「い」と傍記。

【異同】 3 を——お 6 ゑ——え 7 ゑ——へ
 8 き——い

51ウ (54ウく55オ)

- 1 ひとつとなく大宮人の恋しきにさくら
 2 かさししけふもきにけりいとつれくなる
 3 に大との、三位中将はいまは宰相に成て人
 4 からのいとよければ時世の覚えおもくても
 5 し給へと世中あはれにあちきなくものを
 6 ことに恋しく覚え給へはことの聞えありて
 7 つみにあたるともいか、はせんと覺しなして
 8 にはかにまうて給ふうちみるよりめつら
 9 しくうれしきにも、ひとつなみたそこほれ

【異同】 5 を——お 7 し——し^り 9 き——さ

52オ (55オく55ウ)

- 1 けるすまひ給へるさまいはんかたなくからめい
 2 たり所のさまゑにかきたらんやうなる
 3 に、竹あめるかきわたして、いしのはし、松
 4 のはしらおろそかなる物からめつらかにをか
 5 し山かつめきてゆるし色のきかちなるに

- a 「て」に朱墨で濁点を書く。
- 6 あをにひのかりきぬさしぬきうちやつれ
 - 7 てことさらに中ひてもてなし給へる
 - 8 しみみしくみるにゑまれてきよらなり
 - 9 とりつかひ給へるてもかりそめにし

【異同】 1 ひ—ゐ 4 お—を を—お

7 て—ナシ 8 く—う ゑ—え

52ウ（55ウ〜56オ）

- 1 なしておまし所もあらはにみいれらるこそ
- 2 くろくのはんてうとたきのくなとゐ中
- 3 わさにしなしてねんすのくおこなひつと
- 4 め給ひけりとみえたり物まいるなどこと
- 5 さらどころにつけけうありてしなしたり
- 6 あまともあさりしてかいつ物もてまいれ
- 7 るをめし出て御らんすうらにとしふるさま
- 8 などとはせ給ふにさまくやすけなき身の
- 9 うれへを申すそこはかとなくさへつるも

【異同】 3 お—を

9 うれへ—う（れい）へ へ—え

53オ（56オ〜56ウ）

- 1 心の行方はおなしことなにかことなるとあは
- 2 れにみ給ふ御そともなとかつけさせ給を
- 3 いけるかひありと思へり御むまともちかく
- 4 たて、みやりなるくらかなにそなるいね
- 5 とりいて、かふなとめつらしくみ給ふあすかる
- 6 すこしうたひて月比の御物かたりなきみ
- 7 わらひみ若君の何ともおほさて物し給ふか
- 8 なしさをとおと、の明くれにつけておほしなけ
- 9 くなとかたり給ふにたえかたく覺したり

a 朱墨で「も」の下に補入記号を入れ、「世と」と傍記。

【異同】 3 く—う 5 く—う

7 も—もよを 9 え—へ

53ウ（56ウ〜57オ）

- 1 つきすへくもあらねは中くかたはしも^a
- 2 まねはすよもすからまとろますふみつ
- 3 くりあかし給ふさいひなからももの、きこゑ
- 4 をつ、みていそき返り給いと中く成御かは
- 5 らけまいりてゑひのかなしみなみたそ、く
- 6 春のさかつきのうちともろ声にすんし
- 7 給ふ御とももの人も涙をなかつおのかし、はる

- 8 かなるわかれをしむへかめりあさほらけの
9 空にかりつれてわたるあるしの君

a 「も」の下に朱墨で「え」と書く。

b 朱墨で「れ」の下に補入記号を入れ、「を」と傍記。

【異同】 1 も—もえ 3 糸—え 5 ひ—い

- 7 お—を はるか—はるわっか〈か〉
8 を—をお

54オ (57ウ)

- 1 ふる郷をいつれの春かゆきてみんうら山
2 しきはかへるかりかね宰相さらに立いてんこ
3 こちせて
4 あかなくにかりのとこよをたちわかれ花
5 のみやこにみちやまとはんさるへき都の
6 つとなとよしあるさまにてありあるしの君
7 かくかたしけなき御をくりとてくろこま
8 たてまつり給ゆ、しくおほされぬへけれ
9 と、かせにあたりてはいはへぬへけれはなと。

a 朱墨で「り」の下に補入記号を入れ、「に」と傍記。

b 朱墨で「は」に濁点を書くものの、それをミセケチにするか。

c 朱墨で「と」の上から「ん」と書き、左下に「と」と書く。

【異同】 4 かなく—ちきそイかなく 7 り—りに

- 8 く—う 9 へ—え な—なん

54ウ (57ウ、58ウ)

- 1 と申給ふ世にありかたけなる御むまの
2 さまなりかたみに忍ひ給へていみしき
3 ふえの名ありけるなどはかり人とかめつへ
4 きことはかたみにえしたまはず日やうく
5 さしあかりて心あはた、しければ返りみ
6 のみしつ、出給ふをみおくり給けしき中く
7 なりいつ又たいめんたまはらんとすらむ
8 さりともかくてやはと申給にあるし
9 雲ちかくとひかふたつも空にみよ我は

a 朱墨で「き」の下に補入記号を入れ、「いと」と傍記。

【異同】 6 お—を き—きいと

55オ (58ウ、59オ)

- 1 春ひのくもりなき身そかつはたのまれな
2 からかく成ぬる人はむかしのかしこき人たには
3 かくしく世に又ましらふことかたく侍りけれ
4 は何か都のさかひをまたみんとなんおもひ

5 侍らぬなどのたまふ宰相

6 なたつかなき雲るにひとりねをそなくつ

7 はさならへし友を恋つゝかたしけなくなれ

8 聞え侍りていとしもとくやくしく思ひ給へら

9 るゝをりおほくなとしめやかにもあらて帰り

a 「な」の下に朱墨で「む」と書く。

【異同】 3 く——う 4 ん——む 8 く——う

9 を——お な——なん

55ウ（59オ〜59ウ）

1 給ぬる名残いと、かなしくなめくらし給／やよ

2 ひのついたちに出きたるみのひけふなんかく

3 おほすことある人はみそきし給へきとなま

4 さかしき人のきこゆれは海つらもゆかし

5 て出給ふいとよろそかにせしやうはかりを引

6 めくらししてこのくに、かよひけるをんやうし

7 めしてはらせさせ給ふ舟にことくしき人

8 かたのせてなかすをみ給にもよそへられて

9 しらさりし大海原になかれきてひとかた

a 「しや」に朱墨で「軟障」と傍記。

b 「き」の下に朱点。

c 「か」に朱墨で濁点を書く。

【異同】 1 く——う 4 く——う

5 お——を せしやう——軟障

6 をんやうし——陰陽師

56オ（59ウ〜60オ）

1 にやは物はかなしきとてゐる給へる御さまさる

2 はれにいて、いふよしくなくみえ給ふうみの

3 おもてうらくとなきわたりて行えもしら

4 ぬにこしかた行きき覚しつゝ、けられて

5 やをよろつ神もあはれと思ふらんおかせ

6 るつみのそれとなければとのたまふにはか

7 にかせふきいて、空もかきくれぬ御はらへ

8 もしはてすたちさはきたり／ひちかさ雨と

9 かふりきていとあはた、しければみなかへ

a 「き」に朱墨で濁点を書く。

【異同】 1 さる——へさる 2 ふ——う

3 え——ゑ お——を 6 は——わ

56ウ（60オ〜60ウ）

1 り給はんとするにかさもとりあへずさる心も

2 なきよろつふきちらし又なきかせなり

- 3 波いといかめしくたちきて人々のあしをそら
- 4 なり海のおもてはふすまをはりたらんやう
- 5 にひかりみちて神なりひらめくおちかゝる
- 6 心ちしてからうしてたとりきてかゝるめは
- 7 みすもあるかなかせなとはふくけしきつきて
- 8 こそあれあさましくめつらかなりとまどふ
- 9 に猶やますなりみちて雨のあしあたる所

a 朱墨で「く」の上に補入記号を入れ、「けと」と傍記。

【異同】 7 く——けと 8 く——う

57オ (60ウ〜61オ)

- 1 とをりぬへくはらめきをつかくて世はつき
- 2 ぬるにやと心ほそく思ひまとふに君はのと
- 3 やかにきやう、ちすんしておはすくれぬれは
- 4 神すこしなりやみて風そよるもふくおほく
- 5 たてつるくわんのちからなるへし今しはしかく
- 6 たにあらは波にひかれていりぬへかりけり
- 7 たかしほといふ物になんとりあえず人そこ
- 8 なるゝとはきけといとかゝることはまたしら
- 9 すといひあへりあかつきかたみなうちやすみ

【異同】 1 を——お

57ウ (61オ〜61ウ)

- 1 たり君もいさゝかねいり給へれはそのさまとも
- 2 みえぬ人きてなと宮よりめしあるにはま
- 3 いら給はぬとてたとりありくとみるにおと
- 4 ろきてさは海のなかのりう王のいといたく
- 5 物めてする物にてみいれたる成けりとおほ
- 6 すにいと物むつかしくこのすまひたえかたく
- 7 おほしなりぬ

【異同】 4 く——う

6 く——う ひ——ゐ え——へ

三、書入れと日本大学本との相違

本帖の書入れは、合点、朱点、朱墨による書入れの三つに分けられる。この三つの観点から、本帖の後半を整理したい。

本帖に書入れられている合点は、第三一丁オモテ八行目「こまやかにて」、第三二丁ウラ五行目「たのもしき」についているもの以外は、全て日本大学本と一致する。そして、これらの合点の箇所を諸古注釈書で見ると、安土桃山時代以降の注釈書を基にしたのではないかと考えられる。

次に、朱点についてだが、学習院大学本の朱点の位置と、日本大学本の朱点の位置は、一九か所が一致する。日本大学本は、白

黒の影印であるため、朱点の見逃しがある可能性も否定できないが、一致する一九か所以外の朱点は、以下の通りである。

(一) 学習院大学本にあつて日本大学本にない箇所

三八丁ウラ三行目 三九丁オモテ七行目

四三丁ウラ五行目 四四丁オモテ五行目

四五丁ウラ六行目 五五丁ウラ七行目

(二) 日本大学本にあつて学習院大学本にない箇所

三二丁ウラ五行目 四九丁ウラ三行目

五〇丁ウラ八行目 五三丁オモテ四行目

これらの箇所については書写時の写し忘れや誤写が考えられる。そもそも、朱点は、句読点を打つ位置と一致する可能性が高い。ただし、右掲の異なる箇所のうち、四三丁ウラ五行目は「御かへりもさやうになんかみ・なくく返りて」、四五丁ウラ六行目は「思ひやりふかくあはれなれはまかて・ちるもなし」、五三丁オモテ四行目「御むまともちかくたて、みやりなる・くらか」となっており、句読点の位置とずれているといえる。一致する一九か所の中にも、句読点の位置とは明らかにずれるものもあるが、異なる箇所の中の三か所が句読点に一致しないことは、誤写の可能性が高いといえよう。

次に、朱墨による書入れだが、これは、学習院大学本を書いた後に、他の本を用いて校合した痕跡であると考えられる。三〇丁ウラまでとは違い、学習院大学本・三条西家本ともに書入れが多。学習院大学本の朱墨による書入れの多くは、日本大学本の本

文と一致する。ただし、日本大学本の書入れが学習院大学本に一致する例もある。このことから、学習院大学本の校合に用いた本が日本大学本ではなかったことがわかる。ただし、校合本は、日本大学本に近い本文を用いていたといえる。

さらに、本文の違いについてみてゆく。三三丁オモテ七行目「へたて給はし」は、横山本が「へたたまはし」、肖松本と日本大学本、河内本系、別本が「へたまはし」となっている。

三九丁ウラ一行目「御ありさま」は、河内本系の本文としか一致しないが、その直前の「なつかしくめてたき」の語順は定家本系の本文と一致する。また、同丁六行目の「御ありさま」は、陽明文庫本のみ一致する。このあたりは「御さま」と「御ありさま」の違いのみであることから、目移り等の可能性が高く、あまり重要視しなくて良いと考えられる。

四〇丁ウラ一行目「心」は、同様の本文は別本の御物本のみである。

四一丁オモテ八行目「思ひやり給ふにも」は、定家本系ではなく、河内本系の本文と一致する。また、この箇所は日本大学本では補入本文となっており、それは定家本系の本文と一致する。

これらのことから、書写者の問題も多分にあるものの、学習院大学本と日本大学本の親本は同じものではなく、また、校合に用いた本も同じものではないということがわかる。ただし、「須磨」巻にある大きな異同箇所に関しては本文が一致していることから、それほど大きな隔たりのある本文ではなかったということ

もいえる。

四・学習院大学本「須磨」巻

学習院大学本「須磨」巻の後表紙見返には、「入道久我殿女房」^{〔五〕}とある。久我家の系図を見る限り、出家者が多いため、人物の特定は不可能である。また、この本は、学習院大学が三条西家から直接譲り受けた本である。このことから、三条西家に「入道久我殿女房」が出入りしていたと推測できる。また、持ち運びを重視した折紙綴葉装であることから、歌会などに持っていかれたものと考えられる。

最後に、学習院大学所蔵三条西家旧蔵本「須磨」巻についてまとめる。

- ① 合点は、安土桃山時代以降の注釈書に基づいている。
- ② 学習院大学本、日本大学本の親本は、詳細に見てゆくと違いがあるものの、大筋では近い本文である。
- ③ 朱点、朱墨による書入れが日本大学本と一致する箇所が極めて多いものの、学習院大学本の校合本は日本大学本に近い別の本である。
- ④ 三条西家に入入りしていた「入道久我殿女房」の手によるもの、あるいは本人の持ち物であったと考えられる。
- ⑤ 昭和二〇年代まで三条西家に所蔵されていたことと、本の形態が折紙綴葉装であることから、歌会などに持っていくものとして作成された可能性ある。

注

〔一〕 佐々木孝浩（『日本古典書誌学論』笠間書院、二〇一六年）は以下のように述べる。

薄い紙でも一度折って折目を下に揃えてから重ね用い、れば綴葉装を製作することができる。このやや特殊な装訂も様々な名で呼ばれているが、ここでは「折紙綴葉装」と「複式列帖装」の名称を紹介しておきたい。

〔二〕 佐々木孝浩（注一に同じ）は、「折紙綴葉装」について、以下のように述べる。

安価な紙で高級な装訂が製作できることに加えて、重い斐紙で製作される綴葉装とは異なり、軽量な本ができる点も特徴である。その使用率は綴葉装全体では極めて少数だが、十五、六世紀頃に全国を旅して連歌を指導し、その実作に必要となる古典文学を講じていた連歌師達の用いた書物に見かけることが多いのは、軽量でありながら見栄えも良かったことが理由であろう。

〔三〕 武藤那賀子「三条西家旧蔵本（学習院大学所蔵）『源氏物語』「須磨」巻の書誌解題と翻刻——日本大学所蔵三条西家旧蔵本との比較——（前半）」『学習院大学国際研究教育機構年報』第四号、二〇一八年三月。なお、二十七丁ウラ一行目の「ら」の下の補入文字を判読不明としていたが、「すか」と読める。

〔四〕 『日本大学蔵 源氏物語 第三巻 三條西家証本 三』平文社、一九九五年

〔五〕 注三に同じ。

〔六〕 黒板勝美、国史大系編修会（編）『新訂増補国史大系・尊卑分脈』吉川弘文館、一九六六—一九六七年

* 本稿は、JSPS 科研費 17K13392 の助成を受けたものである。

* 貴重な古典籍の閲覧・撮影・掲載を許可してくださった学習院大学日本語日本文学科に厚く御礼申し上げます。

（むとう ながこ
―客員研究員―）

鹿児島国際大学専任講師／学習院大学国際センタ



Commentary on and a Reprint of a Volume of “Suma”,
the 12th Chapter of *Genji Monogatari*, Held by
Gakushuin University and Previously Owned
by the Sanjonishi Family:

A Comparison with the “Suma” Held by Nihon University and Also
Previously Owned by the Sanjonishi Family (Second Half)

Nagako Muto

Abstract

Gakushuin University holds a volume of the “Suma” chapter from the Tale of Genji (*Genji monogatari*) which was copied in the early Edo period, and whose binding is the *origami tetsuyousou*. It must be noted that the volume was previously owned by the Sanjonishi family, since this type of binding was generally seen in the libraries of *renga* poets. Moreover, the volume is precious because of its especially small size (13.6 cm long and 9.8 cm wide) and the temporary binding thread. It is also significant that the relationship between the Sanjonishi family and the Koga family can be inferred from a note by “the maid of the Nyudo Koga” (入道久我殿女房) on the end paper of the back cover. Therefore, this study includes a reprint of the text and the notes in this volume and evaluates it by comparison with the volume of the same chapter held by Nihon University and which also belonged to the Sanjonishi family.